

賀川豊彦の初期事業

賀川記念館研究員／関西福祉大学教授 近藤哲郎

これは、貧民窟における賀川豊彦の初期事業の実態と意義を理解できるように、賀川豊彦の著作・文献からデータを拾い出し、賀川自らが語るという形で再構成したものである。使用する著作・文献は、『貧民心理の研究』（1915年）を中心に、『賀川豊彦初期史料集』所収の日記と「救霊団年報第二号」、「神戸イエス団年報」、さらに「貧民心理について」（1917年）「貧民窟物語」、「貧民窟の二畳敷より」、「貧民窟十年の経験」（いずれも1919年）、および「セツルメント運動の理論と実際」（1926年）である。

構成とその概要は以下のとおりである。

I. 『貧民心理の研究』の構想

賀川が約5年間の貧民窟での実践ののちに上梓した『貧民心理の研究』がどのような構想の下につくられているかという観点からそれに関連するデータを整理し、『貧民心理の研究』の基本構想が有効な救済策を構築する前提としての貧民心理の把握にあったことを明らかにする。

II. 神戸の貧民窟

当時の貧民窟やそこでの人々の生活を賀川はどのように捉えていたか、その概略を理解するために有効であると思われる資料をいくつか拾いあげ、簡単に整理する。

III. 救霊団事業の実践と貧民心理の研究

賀川がその初期事業をどのように実践したか、またその実践のプロセスにおいて、貧民窟の人々の心理（行動パターン）をどのように把握したかという観点から、それに関連するデータを網羅的に拾い出し、初期事業プランに沿って整理しながら賀川の貧民窟での経験を再構成する。構成は以下のとおりである。

1. 無料宿泊所
2. 病者保護
3. 葬式執行
4. 医薬施療
5. 資本貸与・生活費支持
6. 安料理・一膳飯天国屋
7. 職業紹介

8. 慰安（高齢者）

9. 日曜学校

IV. 貧民の心理とソーシャルワーク（救済事業からセツルメントへ）

賀川豊彦が初期事業の実践を通して把握した貧民窟の人々の心理的特性（その力、強み、弱点、困難）は、貧民窟における救済事業の実践に何らかの指針を提供する。しかも、賀川自身は、貧民窟での実践のあり方として、《救済事業》から《セツルメント（ソーシャルワーク）》へとゆるやかに転回する。このような経緯を踏まえつつ、貧民窟での生活支援（ソーシャルワーク）というきわめて実践的な観点から、実践のガイドラインとして役立つようなデータを拾い出し、貧民の心理との関連で整理する。いわば読者が賀川豊彦のように実践するための指針である。構成は以下のとおりである。

1. 「貧民に対する言語、作法は最も注意しなくてはならぬ」
2. 「善人の様に柔和な人でも貧民窟では決して気を許してはならない」
3. 「この人なら大丈夫だと信用していると背負投げを食わされる」
4. 「貧民を親切に取扱うとつけあがる」
5. 「三時間や四時間は面白くもない同じことを聞く気でなければ成功しない」
6. 「貧民は依頼心が強い」
7. 「説教は決して彼等を動かし得ない」
8. 「貧民はよく嘘をいう」
9. 「貧民は感謝しない、しかし感恩の念を忘れてはいない」
10. 「小さい約束でも守らねばならぬ」
11. 「貧民は尊敬と愛で近づくべきものである」
12. 「救済するのではなく、友達としてそこに植民するのではなくてはならぬ」
13. 貧民窟改良家の二つの心得

I. 『貧民心理の研究』（1915年）の構想

まず、なぜ賀川豊彦は貧民窟へ入ったのか。これについては諸説ある。しかし、ここでは賀川が約5年間の貧民窟での実践ののちに上梓した『貧民心理の研究』（1915年／大正4年）がどのような構想の下につくられているかという観点から、それに関連するデータを整理した。

文中「」内の概ねMS明朝体で記した部分はすべて賀川の書籍・論文からの引用であり、出典はその都度明記した。但し、読み易さを考慮して表記上若干の変更をくわえた箇所がある。そのうえで多少補足が必要な点についてはHGゴシック体での補足・解説をくわえる。

(1) 貧民窟の生活法を研究する

1909年（明治42年）のクリスマスの前夜、21歳の賀川豊彦は、「荷車の上に私の凡ての財産―と云つても、蒲団と書物と衣類四五枚―を積んで、自分手に」神戸葺合新川の貧民窟（スラム）の借家に入った。

貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6) 21p

「知らぬ貧民窟へ突然飛び込むと云ふことは、岩見重太郎〔諸国を漫遊してヒヒや大蛇を退治したとされるヒーロー〕が探検か冒険に出かけるのと少しも変つたものではない。私の岩見重太郎の冒険には、いつも丸山と一緒に居た」。

貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6) 25p

丸山兵吉とは木賃宿の宿費を滞らせて賀川の家に来た男だが、「決して労働には行か無かつた。それで私もしびれを切らして、こんななまけものと思つたことは度々であつた」。しかし、「人の善い丸山、よく祈る丸山、貧民生活に熟練して、色々の問題が起つても平気で受け流して行く丸山は、私が貧民窟の生活法を研究するには是非置いておかねばならぬものだから、其後私は不平も云はず、彼を捨て置いた」

貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6) 24p

(2) 貧民窟を救ふに道はないものか？

貧民窟に入って一ヶ月後の1910年（明治43年）1月26日、賀川は貧民窟生活の辛さを吐露しつつも自らの意志を書き綴った詩を日記に書きとめている。タイトルは《狂》。以下に示すのはその一部である。

狂

思うて 狂ひ 祈つて 狂ひ
たゞ 魔にさゝれたようです。

…

思つたやうな 勉強もできず 思つたやうな
伝道もできず、

奇蹟も起らず 半鐘も鳴らず 平凡で 平凡で
それに不潔な貧民窟の一壁の色、鯨の肉
の色、年中乾いたことのない、

道一いやだ一臭い一便所一道側の室と云へ
ば 破れ障子一

…

天井の埃 雨戸の埃 思つてもいやですよ。

生活に慣れないとつらひ、

それでも 一月は 早や貧民窟の生活をし
たのですよ。

ア、恐ろしい ペスト！

…

おとめが ペストで死んだのですと、

ア、恐ろしい、あなたにも 伝染(うつり)ます
よ。

さあ、お逃げなさい 貧民窟はうるさいでし
やう。

泥溝 鯨の腐肉 便所一

お、私の心は全く 狂つちやつた。

…

人間が貧民窟に 住んで 何の役にたつ？
心に とうとう狂ひがきた。

あゝ 夢が… 醒めたやうだ。

…

あゝ 醒めた、醒めました

何か知らぬが 何故か知らぬが 醒めた。

…

雫が 軒にぼちぼち落ちてゐる。

七輪の火は消えた。

近所の 貧民共は ざわざわ騒ぐ

また思ふと また狂ふ

貧民窟を救ふに 道はないものか？

(1910・1・26)

賀川豊彦初期史料集 394p-395p

のち『涙の二等分』に所収 賀川豊彦全集(20) 5p-6p

(3) 救霊団事業プラン

道者覚悟』と題する文章を記している。そこには《救霊団事業》として11項目の事業プランが書きとめられているが、それらは二年後の『救霊団年報第二号』の事業報告にほぼ重なり合うものである。つまり、賀川の貧民窟における初期事業とは、当初より、あるいは少なくとも非常に早い段階から賀川がもっていたプランの実践であったということがで

きる。

狂熱伝道者覚悟 二月十六日水曜日 1910年(明治43年)

- 一、我等の狂熱には群衆の後援なし。されどもジウジ、フオクスの狂熱には後援なかりき。
- 二、然れども狂熱伝道には規律的連続的激熱を要す、而も我等は外部的規律の後援なし。ウエスレーの馬上説教を思へ、ブースの自動車説教を思へ。
- 三、朝は讚美伝道をなすべし。五分間説教をなすべし。
- 四、昼は正午の労働者に語れ。
- 五、夜は呼唱せよ、辻に立てよ。
- 六、狂熱はリバイバルに非ず、狂熱は伝道也。〇〇〇〇を熟読して、狂熱者の心理を回想せよ。

救霊団事業

- | | |
|-----------|---------------|
| 一、安料理 | 七、雇人口入部 |
| 二、無賃宿所 | 八、日曜学校 |
| 三、子供預所 | 九、小供理髪、小供入浴 |
| 四、資本無利子貸与 | 十、慰安部 |
| 五、医療施療 | 十一、日曜説教及水曜祈祷会 |
| 六、葬礼部 | |

賀川豊彦初期史料集 400p

(4) 東京にて研究すべき要目

さらに1910年(明治43年)8月26日付けの日記には、当時の賀川が《東京にて研究すべき要目》とした事柄のメモが残されている。概ね東京の貧民窟と代表的な支援組織や人物が一覧されている。要目の内容は次のとおりである。

- | | |
|---------------------|------------------------|
| (1) 四ツ谷鮫ヶ月 | (8) 労働者矯風会 |
| (2) 芝新網 | (9) 神愛幼稚園 |
| (3) 本所富川町〔深川富川町か?〕 | (10) 下谷万年町特殊学校 長坂本龍之助氏 |
| (4) 浅草浅草町 | (11) 家庭学校 留岡幸助氏 |
| (5) 深川花町〔本所花町か?〕 | (12) 東京に於ける保育事業 |
| 以上は東京の貧民窟及び木賃宿営業区域 | (13) 原胤昭氏 出獄人保護事業 |
| (6) 四ツ谷二葉幼稚園 | (14) 癩病院 |
| (7) 救世軍木賃箱宿屋〔箱舟屋か?〕 | (15) 無賃宿所 |

賀川豊彦初期史料集 430p

(5) 貧民心理の研究

貧民窟において救霊団事業（初期事業）を実践しつつ、一方で貧民窟の生活法、他方で貧民窟を救う道の研究を進めていくなかで、賀川の到達した点が《貧民心理の研究》という課題であった。すなわち、貧民窟を改善するための有効な施策とは、貧民窟の人々の心理に根拠をおくものでなければならないとする観点の獲得である。

「之を実践社会学から見ても、如何にして、最も人間らしい救済制度を設けたいと考へましても、或は社会設置を致したいと考へましても、これはどうしましても今までの様に、経済と経営ばかりの慈善事業や、社会改良策では無くて、一層心理的な、一層人間らしい、人間中心の科学的のやり方があるだらうと思へるので御座います。そしてこの出発点は、どうやら貧民心理の研究にある様に考へられるのであります」。

貧民心理について（一） 1917（大正6） 救済研究 5(7) 708p-709p

「例へば、ここに宗教家がある。一個の貧民部落を改善せんとする。その時に、彼はどれだけまで精神生活の唱導により、どれだけまで物質の補助と改良によらねばならぬか等の問題を解決するは、全くこの貧民心理学によるより外にないのである。

で、もし之が貧民心理学によつて全然解決出来るならば、社会改良家は長年の経験によつて、一被救護者を取扱ひ得ると云ふ様な煩はしさがなくなるのである」

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 6p

要するに、この段階での賀川の課題は、貧民窟の人々の典型的な行動パターンに関するデータを収集し、それを貧民窟の人々の心理的な傾向、すなわち感覚、感情、意志の特性として分析し把握することであった。そして、そのように把握された貧民窟の人々の心理的特性を基盤として、必ずしも「社会改良家の長年の経験」に頼る必要のない、十分に経験的（科学的）な根拠をもった（所謂 evidence-based な）、普遍的に有効な救済策を探ろうとしたのが『貧民心理の研究』の基本的な構想であったといえることができるだろう。賀川が百年前に抱いたこの構想がどの程度成功したかはともかくとして、次にその思考パターンを示す一例をあげよう。

(6) 人殺しの貧民心理と救済策

「〔明治〕四十二年の統計によれば、稍〔やゝ〕資産のあるもので殺人罪を犯したものは97人

であるが、貧民の殺人犯人はその6倍半、647人となつて居る」。

貧民心理の研究 1915 (大正4) 賀川豊彦全集(8) 140p

ところが、「貧民の…殺人犯に就て見るも、殆ど常人が理解の出来ない様なもので有つて、弍拾銭のことから人殺しをする(私の家で殺された男の如き)、妻の喧嘩を買ふて人を殺す(私の日曜学校生徒の父栄太郎と云ふものゝ如き)、賭博してゐて勝つたから帰ると云ふのは卑怯だと云ひ(私の住んで居る貧民窟では数年前によくあつたことである)、姦通と邪推し(大正元年十二月二十九日私の近所で有つた殺人犯の原因)、たゞ酒興の上で、また間違つて、寺の賭場を尋ねて行つて寺の住職が案内せぬと云ひ(私の知つて居る A と云ふ男の如き)、誠に常識では全く判断が出来ない」。

貧民心理の研究 1915(大正4) 賀川豊彦全集(8) 263p

つまり、「貧民の意志が反射的であるばかりに人殺しをしなくてもすむ所を人殺しすることがある」。貧民心理について(三) 1917(大正6) 救済研究5(9) 958p

「私は人を殺した男二人と二年以上同棲した。兩人共善人で有つた。その外殺人犯で入獄したものを十数人知つて居る。然し彼等は貧民窟で決して悪人では無い。…貧民窟で去年〔1918年／大正7年〕五回ほどの殺人が有つた。然し、故殺〔故意犯〕と云ふ可きものは一つも無い。彼等には責任が無いと云うても善い程である。たゞ彼等の意志があまりに衝動的で有つたのだ」。

貧民窟の二畳敷より 1919 (大正8) 『雄辯』10(4) 49p-50p

「貧民の犯罪…殊に人殺しするものは、…激昂すると全く性格が分裂してしまつて何が何やらわから無いのである。貧民窟の子供の激越性は少ない時から拘束すること無しに捨てゝ有るので、それこそ手のつけ様の無い程放縦なものである。それが心理的アウトマチックモーション〔オートマチック・モーション〕(自動感応運動)で、活動を開始するものであるから、実に厄介である。之は今日の貧民救済が心理的救治をまたなければならぬ点である」。

貧民窟十年の経験 1919 (大正8) 賀川豊彦全集(9) 159p

すなわち、賀川は、貧民窟での殺人の多発という問題の背後に、さらに一步踏み込んで貧民窟の人々に一般的な心理的傾向(感情の激越さ、開放性、統御不能であること、また意志の反射的・衝動的であること)を把握し、それを貧民窟の人々の抱える心理的な困難(問題)として捉えなおし、その救済策として(もちろん唯一ののではないが)心理的救治の必要性を指摘するのである。

II. 神戸の貧民窟

『貧民心理の研究』の基本的な構想を以上のように理解し、救霊団事業の展開へと進む準備段階として、ここでは、当時の貧民窟や貧民窟の人々の生活を賀川はどのように捉えていたか、その概略を理解し、基本的なイメージを共有するために有効であると思われる資料をいくつか拾いあげ、簡単に整理した。

(1) 貧民窟の過密

「神戸の貧民窟と云ふのは七ヶ所にある。…それで労働者が7万7千人、貧民がどんなに見積つても2万5千人はある。…[その中で]最も激しいのは私の住んで居る新川の貧民窟で、神戸でも一番人口の密な処である。たとへば私の住んで居る町内の如きは、戸数が320戸あるが、正に1千2百12人と云ふ夥しい人々が居る。それが六十間四方〔109.1㎡〕にも足らぬ所に住んで居るのだから、堪らない〔この場合人口密度は1㎡あたり11人になる〕」。

ちなみに、大正2年の葺合新川では、戸数は1944戸、人口は男3810人、女3700人、計7510人である。さらに「十四軒の木賃宿〔ドヤ〕にはどうしても毎晩800人以上が宿つて居る」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 41～42p

(2) 死亡率

貧民窟の死亡率は極めて高く、「之を神戸の比較的富有な市街に比較すると…私の住んで居る町内…の死亡率は丁度四倍位違ひ、…又、日本全国の死亡率と比較すると二倍に当る」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 74p

すなわち、「所謂上流の人々が住んである処では千人中僅かに七人位であるが、…中流の人々が生活してある処では十二に増し、貧民の住む…海岸近くに密集してある者は四十五人から五十一人といふ多数が死亡する」。

社会事業の永遠性 1927（昭和2） 社会事業研究 15(11) 7p

(3) 乳児死亡率

また、当時の貧民窟では乳児死亡率も約40%に達した。すなわち、「大体調査結果、乳児死亡率が高く、恐らく日本に於ても最高位を示すのであらう、約40%とまでは乳児、満一箇年未満で死亡するのである。湿気の多い暗黒なる、埃りの多い不衛生なる家では乳児の発育不良のため、栄養不良、生活力沈衰、所謂脳膜炎等の病名で死亡するのである」。

神戸イエス団年報（1929年／昭和4年2月）賀川豊彦初期史料集 1117p

(4) 住環境

貧民窟の人々の住居は、「日本で一番野蛮な貧民窟名物二畳敷と云ふのがある。棟割長屋の汽車の様なものに一坪半位の家が鈴なりに連つて居るのである。そして畳が二畳敷」。その一坪半の家に「平均二人、…十軒に三軒位は…親子五人、また九人と住んで居る」。

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 41p, 92p

しかも、「神戸新川の貧民窟などには三千人に水道は五つの栓しか無い」、「共同便所などは六十戸に三つしか無い」。

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 42p, 95p

(5) 職業

貧民窟の人々の「職業から云へば四十四、五種、仲仕、土方、手伝、尿汲〔こえくみ〕、日雇、人力車夫、馬丁、市役所人夫、葬式人夫、工夫、船乗り／ 燐寸〔マッチ〕職工、鉛職工／ 籠細工、木挽〔きびき〕、表具師、按摩、大工、鋳かけ屋、直し、らほ〔ラオ〕管換屋、農／ 肴屋、煮売屋、飴屋、菓子屋、牛肉売り、青物屋、パンや、薬売り、小間物屋、たどんや、井戸屋、古木屋、古物商、豊年屋、古俵買、屑物買／ 鼠取り、紙屑拾ひ、辻占い、僧、芸人等である。その中で一番多いのは仲仕に、土方に、手伝に、職工である」。

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 42p

(6) 貧民窟の人々の情景

何も無い家

「足を延ばせば壁を突き破る様な一坪の家に、竈〔かまど〕も、ランプも、蒲団も、棚も、飯櫃も、水瓶の一つもあるではなく、唯有るとすれば、箱の三つ四つ、カンテラ、襪襦袢〔らんる／ぼろきれ〕に竈がはりの石が三つ四つ、欠茶碗に、竹箸、土鍋に罐子〔かんす／茶釜〕位のもの、之だけが家の諸道具の全部…之が実際、私の住んで居る貧民窟の今日の現状である」。

衣服と夜具

「貧民は朝から晩まで尻までの着物〔半纏／はんてん〕で満足する。それも古くなると脱ぎ捨て、シャツだけで、ぶらつく。子供は裸体にして、衣服は皆質に入れて食つてしまう。・・・お母さんと子供が一つの衣服を替わる替わるに着てゐることはいつもの事であるが、兄弟同士が一枚の衣服を仲間にして居ることも珍しくない。寒中でも単衣物一枚で平気で居る子供なども沢山あるが、時には蓆〔むしろ〕を着て居る乞食もある」。

「然し可哀相なのは夜具である。彼等は夜具を無くしても、食ひたいらしい。彼等に夜具を貸す程馬鹿なことではない。それは決して返つて来るものではない。大抵質に入れられる。夏冬通し、夜昼通して、着のみ着のまゝである。そんなものが私の町内の半分以上であると云つても間違いはない」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 105p

家庭

「晩が来たとして二畳敷ではまさか家庭団欒と云ふわけにいかず、子供は夜遅くまで帰つて来ない。亭主は何処かで賭博をうつと朝方まで帰らない。女房は一人で何くれと生活上の心配をするのである。それで子供はだんだん悪くなる。悪くなれば貧民窟に置いてはおけぬと田舎へ丁稚にやる。うちには乳飲児とその少し大きなものばかりが残る。亭主は相変わらず賭博をつづける。そして不景気になると妻子を捨て、おいて旅へ逃げ出す。

家庭に慰安があるで無く、結合や責任があるのではない。貧民生活は全く無家庭生活である。然らばこんな両親はどうして結合したかと云ふに全くの悪運。・・・間違つて一緒になつたのである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 193p

おかみさん気質

「貧民窟におちる初めの程はそうでも無からうが、だんだん無頓着になつて、細帯一つで大道を大声して通る。髪は乱れる。家は散らかる。赤坊はぎやぎや今にも息を引き取るかのやうな声をして叫ぶ。竈〔かまど〕の下は燻る、家賃の催促が来る。それでもおかみさんは平気で立話をして居ると云ふのが一種の貧民気質である」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 147p

夜逃げの光景

「貧民は実によく夜逃げする。いや、夜は却つて賑やかなので、『昼逃げ』をする。・・・貧民の逃げ出すのは実に簡単なものである。今の先まで近所で愛相の善いことを云ふてゐたのにと思ふと、鼠の木を嚙るのが止るやうに静かになつて、その家に何だか人氣が無い様に思ふてみると、やが

て古道具屋が諸道具一切を引取りに来る。一切と云つた処が大八車にすつかり乗る位だけしか無い。さうすると近所が不思議がつて覗きこむ。『昼逃げ』だと云ふ評判が長屋を伝ふて拡がる。すると貧民窟の誰れも彼れも、・・・集つて来る。そしてその家の前は二、三十分間は人山を築く。折々皆でドツと笑ひ潰れる、一上手に逃げたと嘲笑して居るのである。

慌てゝ来るのは債権者である。青い顔したり、しかみ面したりしてやつて来る。また大勢で笑ふ。債権者はすぐ帰つてしまふ。人を四方にやつて探す。見物人はその中〔うち〕に散つてしまふ。之がまア一寸と貧民の昼逃げの光景である」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 183p

同情心

「貧民は同情心の深いものが随分ある。中には・・・変質的他愛病と云ふ様な男もある。（私は斯く呼んで置く、こんなものは多く他人の世話をするのでいつも貧乏してゐる。そして時々いらぬお世話もする）。一長屋には必ず一人位はそんな人が居る」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 149p, 151p

暴力主義

「貧民生活に於ける程、暴力的生存競争の烈しい所は無い。・・・弱いのはいつも踏みつけられ、強いものはいつでも勝ち誇つて居る。・・・私など貧民窟で何度脅迫されたか知れ無い。貧民窟に居りさへしなければ何にもそんな辛い目には会ひはし無いのだけれども、辛抱して居ると来るは来るは、刀を持つたりピストル持つて金を強請しに来る。逃げもし、忍耐もした。・・・

貧民窟の破戸漢〔ごろつき〕は私が無抵抗であることをよく知つて居る。それで猶のことつけ上る。・・・私でさへ貧民窟に於ては如斯〔かくのごとく〕いぢめられるのである。他の細民が強者に压制されてゐることは実に可哀相である」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 165p-166p

Ⅲ. 救霊団事業の実践と貧民心理の研究

さて、当時の貧民窟やそこでの人々の生活がおおよそつかめたところで、ここでは、もう少し具体的かつ厳密に、賀川がその初期事業をどのように実践したか、またその実践のプロセスにおいて、貧民窟の人々の心理（行動パターン）をどのように把握したかという観点から、それに関連するデータを網羅的に拾い出し、先に触れた《救霊団事業プラン》および『救霊団年報第二号』の事業報告に沿うかたちで整理した。

1. 無料宿泊所

(1)

まず、賀川が貧民窟へ入って二年目の事業報告の記述である。

「全く無料宿泊などと云ふ看板もかけているわけで無いので、一年半も無料宿泊どころじゃなく、只で食って学校へ行く子供もあれば、近所で蒲団が無いので泊りに来る人もある。全く家内同様で唯今合計八人の家庭で、喧嘩などは男ばかりでもあつたことはありません。それで六ヶ月も居れば独立するもあり、相当に神の愛が解つて出て行きます。…浮浪人は東京と違って必ず仕事はありません、多くは低能か病人ですから食物がいります。…之で三十人以上のものが一ヶ月以上居たでしょう。其外無料給飯は二十名以上に渡り、大抵二週間以上食ひに来ます」。

救霊団年報第二号（1911年／明治44年12月）賀川豊彦初期史料集 1111p

(2)

もう少し具体的にはどのような実践だったのか。事業開始当初の記述である。

「私の家は間口が二間〔3.6m〕、奥行二間の、表三畳に、奥三畳の家で、それに半間の通庭が入口から裏にまでぬけて居る至極簡単な家で有つた。家賃は一日七銭で、毎日かけて行くので有つた。…之では私と丸山兵吉爺と、病人の安井と三人が住むには餘りに狭いので、私は二軒置いてもう一軒をすぐ借りた」。

貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6)

23p

「この男〔丸山兵吉〕が私には親切で、約二ヵ年間私と起臥を共にした。知らぬ貧民窟へ突然飛

び込むと云ふことは、岩見重太郎が探検か冒険に出かけるのと少しも変つたものでは無い。私の岩見重太郎の冒険には、いつも丸山と一緒に居た。…彼に食はすものが無いので、三度の食事を二度に減らし、着て寝る蒲団が無いので疥癬〔かいせん〕を患つて居る彼と一緒に寝て、私も皮膚をばりばりかいたものである。 貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6) 25p

1919年（大正8年）、10年目の実践の記述である。

「私等夫婦は今二畳の室で寝て居る。元来五畳の家だが、隣の二畳敷は六人家族に借してある。勿論無賃である。つまり私が世話して居るのだ。…然し八人が五畳の家に同居して見ると、実に親しくなるもので、私はその人々に可愛がられる。私が子供がすきなものだから…その気で居るので、その家の子供は皆私が好きだ。私が歌ふと踊り出す。三つの春枝さんが一番よく踊る。」

貧民窟の二畳敷より 1919（大正8）『雄辯』10(4) 51p

(3)

では、この無料宿泊所の提供という実践を通して、つまり、自分の家で貧民窟の人々と同居するなかで、賀川はその人々の心理（行動パターン）をどのように把握したか。関連するデータを列記する。

「私が今世話して居るおぢいさんは変人で有る。非常な潔癖で、私の住んで居る九尺二間の穢い長屋の敷居を毎日洗ふので、敷居だけは私の膚よりいつも白いものになつて居る。」

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 237p

「私の世話して居た或貧民の子供は腹をたてた時、数百頁ある聖書を一頁一頁皆引裂いてしまった。又もう一人の私の世話した貧民の子供は私の貴重な書物を数冊ページの真中より裂いてしまった。貧民の子供の復讐心程懼〔おそ〕ろしいものは無い。」

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 146p

「神戸葺合新川の孝行娘と云はれたお何と云ふ子娘を一年ばかり私は世話したことがあるが、警察署長に賞められて評判の善い子娘ではあるが、性行が連続的で無かつた。よくお父さんを怒らしてゐた。」

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 130p

「私の宅にも、誤つて人を殺して監獄から出て来た人が二三人居つたことが有る。彼等は皆臆病もので、私がついて居れば幽霊は出ぬが、私が留守だと幽霊が出て仕方が無かつた。私は彼等の日常の行為を見て、人を殺す様なものは、日常は悪人では無くして、全く性格が連続し

ないものであると云ふことを知り得た」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 159p

2. 病者保護

(1)

実践当初の記述である。

「最初の年は、病人の世話などする気はありませんでしたが、・・・金が無いので、或紐育〔ニューヨーク〕の牧師の夫人が五百五十円を私に送られたので、最初の一年は之でやりました。その当時、私の食費は、一ヶ月五円位で足りましたから、私は一ヶ月五十円で十人の食へ無い人を世話することに定めて居たのでした。

然し来る人も来る人も重病患者であるには全く驚きました。私は病人の中に坐つて悲鳴をあげました。多い時には五畳の家を五軒かりて、十六人のものが寝て居りました。・・・貧民の病人の中に腸結核の多いのには閉口いたしました。

私は充分金も無いし、勉強もしたいし、貧民窟の研究もしたいし、その当時は余程弱つてしまひました」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 158p

実践二年目の事業報告である。

「去年〔1910年／明治43年〕十月金が無くなつて止めようと思つていると有名なアメリカの牧師エッチ・ピアソン氏より寄附があつて、去年十二月には五人、一月十人、二月六人、三四五月四人、六月二人、七月より九月迄二人、九月より一人、今は金が無いから一人きり病室に寝ていられます。・・・本年は・・・金を多く出して病人を世話致しました甲斐あつて、・・・十人以上の生命を救ひました。之は神の力です」。

救霊団年報第二号（1911年／明治44年12月）賀川豊彦初期史料集 1111p

(2)

病者保護の具体的な実践と、その実践を通して賀川の把握した貧民心理（行動パターン）の記述である。

「私が少し親切にしてやると、・・・凶太いことをする男が貧民窟に居る。私はそれでも黙って居つたが、それはそれは非道いことをする。・・・おみつと云ふ全身不随意の乞食を私が世話してみた。そのおみつが糞便で汚した衣服を洗濯して裏に干してあると早や見え無い。その後またおみつの着物を干すとまた見えない。二、三日たつて、例の前科九犯の泥棒の息子が雨が降るからと云つて米を貰ひにくる。ところがその子供がおみつの着物をきて居る。その弟はとみると、之もおみつの着物をきて居る。黙って居ると、平気なもので、その後度々その着物をきて、うちへ使ひに寄こす。朝起きると金盥〔かなだらゐ〕が無い。バケツが無い。さしあたり困るからそのあたりを探すと、ちやんと裏の家で使つて居る。それで私の方も黙って拝借して帰るのである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 148p-149p

「貧民程食欲に陥り易いものは無い。・・・この癖は多く私の世話した病人に残つてみた。彼等は死ぬまで食物を貪りたがる。淫売の鬼のお梅と云ふ私の家で死んだ女などは、死ぬ日の朝、握飯を三つも四つも手に握つて死んだ。・・・お金をやつて何か甘いものを食つて早くよくなれと云つても、なかなか金を放さない。その中に死んでしまうものなどが沢山ある」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 132p

3. 葬式執行

(1)

『救霊団年報第二号』における実践二年目の事業報告である。

「本年〔1911 年／明治 44 年〕は・・・十二人ばかりの葬式料を払いました。たゞ死亡診断書を取つて上げたのは五六人ありました」

救霊団年報第二号（1911 年／明治 44 年 12 月）賀川豊彦初期史料集 1111p

(2)

葬式について貧民窟の人々の置かれていた状況の発見と、実践を開始する当初の記述である。

「木賃宿に人が死ぬ。『二畳敷』長屋に人が死ぬ。その場合に、私の家の向隣の通名『たべらう』と呼ばれる男が、大きな茶箱を用意して、死体をその中に入れ、一人で背負つて夕闇の中を荷車につんだり、自分の背に負ひなどして、火葬場に送つて居るのでした。・・・貧民の生活の簡単で有る如く、その死も簡単なものでありました」。

「彼等は死んでも葬式が出来ない。…彼等の葬式を見て居ると人間とは決して思へない。或者は蜜柑箱につめられ、或者は茶箱、燐寸箱につめられて火葬場へ行く。語るさへ私は物凄く〔恐ろしい〕」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8)

42p-43p

しかも、非常に興味深いことに、賀川は単にこの問題を問題とするばかりでなく、マスコミを通して情報を発信することで社会的に問題化することを試みている。

「その当時〔明治 43・4 年頃〕は随分神戸新聞を通じて市民に訴へたのですが、誰れも直接に行動を共にしやうと云ふものもありませんでした。それで最初の年は十四、次の年は十九の葬式をしたことを覚えて居ります」

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 157p

(3)

葬式執行という実践を通して賀川の発見した貧民窟の人々の状況と、貧民心理（行動パターン）である。

「不景気が激しくなれば…貧民窟の町通は少なくなり(実際そうだ)夜は減入つて、ほんとに死んだ様なものになる。こうなると、あちらでは三日食はぬ人がある。四日食はぬ人があると云ふ人が現れて来る。そして中には凍死するもの、餓死するものが現はる。私も〔明治〕四十五年の二月飢えて凍死した老人を一人貧民窟で葬つたが、その時にほんとに悲しかった。その人の家は便所の隣で有つたが、一家族八人が二日食はずに居つたそうである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 112p

「私は貧民窟へ這入つて、初めて金の大切なことに気がつきました。そして金五円の為めに…それが欲しいばかりに、…貰ひ子をお粥で殺して、栄養不良として届け出すものですが、…明治四十四年一月二日にその貰ひ子が死んで、私が葬式をして、その後四五日してその家を訪問して見ると、また同じ形の赤ン坊を抱へて居るのです。…それで尋ねますと、食へ無いから貰ふのだと云ふて居りました。そしてその女は、現金のある間は家に寝てばかり居るのです。その女は一月であるのに単衣を着て居りました。勿論蒲団もありませんでした。それで私は衣類と蒲団を与へましたが、すぐ無くして居りました。赤ン坊はその後一ヶ月位は生きて居りましたが、…たうとう二月

の始めに死にました。

それで私は、今度はどうするであらうかと見て居りましたが、死んで第一日には・・・死骸を抱いたまま寝て居りました。第二日目に行つても、そのまま死骸を抱いて寝て居りました。それで私は、もう見るに見兼ねて、私も金が無かつたが、質に置いて葬式したのでした」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 157p

「五十余の男で石炭仲仕であるが一、二ヶ月の中に妻を四度かへ、二人迄死にかゝつた病人を迎へ、その二人とも私に葬式さしたが、・・・女が逃げ出すと、酒を呑んで身体を傷け、家を破壊して悦んでゐた。そして身体に傷がつき、貧相になると、私の処へ見せに来る」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 137p

次の資料は、賀川が葬式を執行する際の自らの心理的变化を記述したものである。

「私は〔明治〕四十三年以後多くの屍体を葬りその屍体の幾つかを自ら洗つた後、得た感覚は、死に対する敏覚〔鋭敏な感覚〕の磨滅と、死の恐怖を知らざる実に殺伐な、残酷な思想であつた。そして貧民の周囲にはいつも棺桶が積み重ねられてあるのである。貧民が道徳的感覚の磨滅するのも或は此辺に原因が存するのかも知れない」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 74p

4. 医薬施療

(1)

医薬施療について実践二年目の事業報告である。

「前田医師と江澤医師へ毎月十五名以上送ります。〔明治 43 年〕八月は薬代四拾円払ひ、十月は十六円払ひました。それで一年二百名以上のものが病苦より救はれて居ます」。

救霊団年報第二号（1911 年／明治 44 年 12 月）賀川豊彦初期史料集 1111p

次の資料は、1918 年（大正 7 年）に診療所を開設するまでの記述である。

「明治四十二年より・・・賀川豊彦は・・・医薬に窮したる病人には自ら医薬師を送り、医代金を支

払居りしが、大正七年〔1918年〕六月貧民窟内に特志看護婦の巡回を開始し、大正七年九月神戸市葺合・・・場所に於て医師姫野準次氏に依頼して無料施療を開始した。

神戸イエス団年報（1929年／昭和4年2月）賀川豊彦初期史料集 1116p

(2)

診療所を開設する以前の医薬施療に関連する賀川の実践である。貧民心理を垣間見ることができる。

「私の宅で初めて信仰を起したものは、小林君で有つた。彼は一年半も脊髄炎で寝て居たものだが、私が祈つて立つことが出来る様になつたと、奇蹟を信じたい貧民の心理から、私の信者となつたので、・・・私のお加持がよく病気にきくと云ひ出した。そして・・・祈つてもらふ為めに、私に病人をつれて来た。そして病人は多く癒された。癒されないものを、私は前田と云ふ医者へつれて行つた」。

貧民窟物語 1919（大正8）『開拓者』14(6) 27p

「私の西隣の淫売屋で去年の冬のことであつた。八百屋の清公と云ふ男が八銭の淫売を金を持たずに買ふて、それで喧嘩となつて、私が仲に這入つた（仲裁に出かけた）ことがあつた。「処が、驚いたことには無銭の男をも、淫売婦をも、淫売婦の亭主も私は皆知つて居る事であつた。然し猶驚いたのは此無銭男、三、四ヶ月後に・・・妻を使ひにたてゝ改心したから肋膜炎に善い医者を送つてくれと私に云つてよこした事である」。

貧民心理の研究 1915（大正4）賀川豊彦全集(8) 129p, 222p

(3)

貧民窟の人々の抱える困難（問題）としての《病氣》を把握した賀川の調査である。

「私は永らくの間、あいつはなまけ者だから貧乏すると金持が云ふのを疑問にしてゐた。それでほんとうに、貧乏人は皆怠惰者で有らうかと考へて見た。然しどうもさう思へなかつた」・・・

「私は神戸葺合新川の貧民窟中の懈怠者〔怠惰者〕男子 56 人、女子 17 人に就て之を研究して見たが、誠に之等『なまけもの』には同情すべき生理的原因のあることを発見した。今男子 56 人に就て見るに全然壮健なものと云ふは僅々 26 名であつて、梅毒患者 9 人、射視 7 人、脳病 3 人、虚弱 3 人、不具 2 人、眼病 1 人、病気が慢性になつたもの 5 人と云ふ有様であつて、半数以上が病人であると云ふことを発見した。然し猶更にその健康なものと云ふものゝ骨格骨相を見ると、どうも生れてから一年以内に何か病気になるらしい幼少の時に萎微〔イビ〕してゐた痕跡がありありと見える。

婦人の方は一層非道い。・・・私の知つて居る婦人懈怠者(多くは淫売婦)の中の 17 名に就て見

るに、その中の 11 名は虚弱、1 名は射視、1 名は色狂。壮健なものは 17 名中僅か 4 人しか無いのである。…

即ち此処で私の論断出来ることは、貧民の間にその六分乃至一割五分のなまけものがあるがその過半は多くは精神的に、肉体的に低能なり、無能であつて、大に同情すべき性質のものであると云ふことである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 244p-246p

次の資料は、1928 年（昭和 3 年）度イエス団友愛救済所（診療所）事業報告における貧民窟の人々の病気に関する記述である。

「第一に呼吸器疾患の多い原因は…塵埃[じんあい]の多い事、人口調密、不良住宅、患者自身又は看護人の智識程度の低いため、その他様々なる原因のため、身体の抵抗力の薄弱にあります。…神経系の疾患は、神経衰弱、ヒステリーが多くあり、彼等は経済問題に原因して絶へず異常に精神を興奮さす結果、…身体を中心を狂はして居るのである。…殊に注目すべきは肺結核患者の多いことである。之は云ふまでもなく…空気、日光、營養等の何れも不利な場所に置れて居るので、如何にしても境遇の改善を図らなければ根絶することは不可能である。道徳的觀念の教養なきために花柳病患者も相当に蔓延して居る」。

神戸イエス団年報（1929 年／昭和 4 年 2 月）賀川豊彦初期史料集 1116p

5. 資本貸与・生活費支持

(1)

商売のための資本貸与、および生活費を提供した実践二年目の事業報告である。

「十七名ばかりに資本金百拾数円を与へました。拾円三名、六円六名、其他一年間リュウマチスの一 가족に米を日に五合平均に与へましたもの、壹円以上与へたものも大分あります。此中半分以上成功して居ります。或者は貳百円も儲けて居ります」。

救霊団年報第二号（1911 年／明治 44 年 12 月）賀川豊彦初期史料集 1111p

(2)

賀川の実践と貧民心理（行動パターン）に関する具体的な記述である。

「立木は…私に手紙で金の要求を毎度繰り返した。私は彼の為めに、三円、五円と与へ

た。…彼は自分が不具者で有ることを知つて居るので、餅売になつた。然し…外の破戸漢〔ごろつき〕には鼠の様に軟柔な立木は、沖仲仕のよく出る弁天の浜へ餅を売りに行くと、大抵一日に売上高の一割か、一割五分はたゞで食はれるのであつた。それで彼は、それに全く悲観してしまつて、改心する気も、正直にやりぬいて行く気も、全く奪れてしまつた様で有つた。そして今度はその不平を私に持つて来た。そして私を刃物を持つて追ひ廻つた」。

貧民窟物語 1919 (大正 8) 『開拓者』 14(6) 22p

「前科十六犯とかあると云ふ老人で有つたが、…私が六円を与へて饅頭売をさせた処が贅沢なことに費し、木賃宿の一間を借り切り、すぐ資本を無くしてしまつたので、私が叱り付けた…。然し此男の自負狂は驚くばかりで、私が畳をやると、その畳を他人に与へて家をもたす。そしてそれ等の人々に「先生々々」と呼ばすから驚いてしまつた。彼は下水掃除人夫に雇れて居たが、「宅へ来い、おまへら助けてやる」と仲間に云つたが原因で喧嘩を初めとうとう失業して私に寄食してゐたが、貧民窟の誰彼無く小使ひの様に命令するので私も見兼ねて田舎へ送り付けてしまつた。気の毒な老人である。こんな老人こそ何かの方法で隔離して救助してやれば善いのだが…」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 239p-240p

「私の知つて居る或る飴売の豊年屋は正月に参円位の借金で困つてゐたが、それを払ひたいとあれこれと苦しんで居る中〔うち〕にその年の終りには五拾円からの借金となり、夜逃げを企てること云ふ始末であつた。それで私は之を助けたことがあるが、彼等が困つてゐることには実に想像がつかぬ」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 56p

「私は…金井おさわは可哀相だからと思つて尋ねて行つた。所が夫は怪我と脚気で苦しんでゐて実に気の毒であつたから、米と金とを残して尚改心するならば出産まで補助すると約束して歸つたが、然し彼女は改心する気の無い女で、…その後づうと淫売に出て、腹の子は流産し、よくなると何処となく姿を隠した。…こんなわけで淫売婦の改心と云ふことは何かの事情が無ければ殆ど不可能なこと云つても善い」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 222p

(3)

商売に関連して貧民窟の人々の置かれた状況と、貧民心理に関連する記述である。

「貧民の中で健康なものは兎に角腕と脛〔すね〕で生きて行くとして、困るのは弱いもの、女、年寄、病人である。それで仕方なしにこれらのものは…小商売人となるのである。だから

貧民窟の凡ての人に聞いて見よ。凡ての人の理想が凡て、ゆくゆくは小商売人になるのだと云つて居るから。…そして商売しさをすれば大儲けがあることのように考へて居る…所が、雨が降る、風が吹く、食ひこむ。さうするともう早や資本が無くなる。借金する。払へない。貧民の商売人程頼りないものは無い」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 51p

6. 安料理・一膳飯天国屋

(1)

安料理の提供（天国屋の開店）とその事業の頓挫に関する記述である。

「食物改良を労働者の福音として決行いたしました。毎月十円以上欠損するのと一寸と悪魔が這入つたので、閉鎖しました。然し之は金が出来たらまた開きたいと思っています。…然し此天国屋で無料で一飯の食を与へたこと数十人、正月の如きお雑煮を無代価で祝へない人々百人に御馳走しました」。

救霊団年報第二号（1911 年／明治 44 年 12 月）賀川豊彦初期史料集 1111p

「私は〔明治〕四十三年に飯屋を開いたことがある。そして労働者に食はせて見た。処がまアどうしても月に六分から一割までは借り倒しに会うことにきまつて居つた。それで小商売人はどんなに可哀相なものかよくわかつた」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 51p

(2)

貧民窟の人々の食生活に関する調査の記述である。

「私の知つている丸山兵吉と云ふ五十ばかりになる男などは二日も三日も食は無くても泰山の如く動かず、実に平気なものであつた。また伊豆と云ふ男が有つたが之も十日も芋のへたばかり食つていたが、平気なもので有る」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 144p

しかし、一方で、「貧民窟の便所を検査すればすぐわかることである。彼等の糞便は実に奇々怪々なるもので、吾人が決して想像だに出来ないものを食つて居るので、赤い糞があるかと思へば、真黒色のものがあり、…それは実にスペクトラムの色にない様なものが出て居る。そして之は全く彼等の食ふ所のものが何であるかを説明して居るので、彼等は…無理をして居るのである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 97p

「こんな風だから、もし安くて魚類とでも云ふ名がつくものがあれば、それが少々腐つて居らうが居るまいが、喜んで買ふのである。…なんでも食ふ。浜で荷揚げの場合捨てたり、落したりしたジャガタ芋〔ジャガイモ〕を拾つて来て食ふ。浜の粉米を拾つて来て食ふ」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 98p

また、他方で、「貧民又労働者の食欲と、胃とは全く普通民と異つて居る。飯は石の様に固いのが評判が善い。…それはそれは何とも云へぬ妙なものを甘〔うま〕さうに食つて居る。飯屋へ行つて私は到底一ヶ月一緒に彼等と共に食事は出来ない。それでも私は努力をしたが、二、三日するとすぐ腸を痛めた。それで私は飯屋では食はないことにした」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 98p

7. 職業紹介

(1)

実践二年目の事業報告である。

「日雇人夫五十名、下女二人、然し之れは進んで致して居りませぬ。之をするには餘り繁劇であります」。

救霊団年報第二号（1911年／明治44年12月）賀川豊彦初期史料集 1112p

(2)

職業紹介（雇人口入）の実践の結果と貧民心理（行動パターン）の記述である。

「然し実際は貧民窟に落ちて来たものは到底一事業に従事することが出来ぬ者と思へば間違は無い。私はあれこれと試みて見たが、宗教的覚醒があれば兎に角、そのまゝでは到底役にたゝぬ。何をさせても駄目である。技量も無ければ、努力もなし油取ることが上手で、命令を聴かぬと云ふのだから手におへぬ。勿論下等労働であれば貧民窟のものにも出来るが、それも彼等は一本筋の道しか行くのが嫌ひで、沖仲仕は葬式人夫に行くのを嫌ひ、土方は手伝を嫌ひ、食ふに困つても仲々働かぬ。…荒仕事の工場なればいざ知らず、神戸の口入屋は皆葺合新川の者を世話することを嫌つて居る。偶々善い者が長く奉公して居るかと思ふと親がすぐ呼び返すのである。それで貧民を職工に使用した召使として使用することは絶望的である」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 109p

「今日迄私は貧民窟から幾十人かの人々を家庭の方へ或は工場の方へ世話を致しましたが、貧民窟で少しでも長く居る様なものは、とても中流階級の人々の様な持続的な意志運動を機械的に出来ないものと見えて、**貧民を熟練工にすることは絶対に不可能だと私には思はれます。**だから私は、貧民窟の中年者を善い工場に世話することを絶対に拒絶して居ります」。

貧民心理について (三) 1917 (大正 6) 救済研究 5(9) 957p

(3)

賀川が《執意遅逡》という範疇で把握した貧民心理（行動パターン）に関する記述である。なお、賀川は《執意遅逡》を《意志薄弱》、《意志の休止》、《实在の虚無を仮想する虚無主義》と言い換え説明する。

「怠惰者をよく研究すると彼等の中には事によくわかつた善人が実に多い。然るに彼等は働きに行かない。ぐずぐずして居る。そしてその日一日遊んでしまふのである。…**怠惰者の多くは決して仕事を厭ふものではない。意志がその観念に伴は無いのである。**私の家に丸山兵吉と云ふ男が二年計り居たが、私も感心する程の善人であつた。然し彼が『わらじ』をはいて戸口に立つと半日位そこですくんで居た。戸口から一歩前へ踏み出す勇気がないのである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 167p

「彼〔丸山兵吉〕は凡てが惰性で出来て居る男と見える。木賃宿の前に立つと六時間、七時間、同じ所に立つて居る。そして決して動かうとしない。然し中へ這入つて寝ることもしない。そうかと云ふて、労働にも行か無い。飯を食ふことでも、働くことも寝ることも面倒臭いのである」。

貧民窟物語 1919 (大正 8) 『開拓者』14(6) 25p

「彼等は便所へ行く執意が遅逡する〔意志が休止する〕ので、庭へ小便をする。…彼等の中には面をを洗ふのを面倒がるものが沢山ある。…衣服が破れたら破れたまゝ捨て置く。綻びを縫ふ執意を欠いで居るのである。**貧民窟の木賃宿から手伝に人夫を雇へ無いと云ふのは全く執意遅逡の人間を雇ふ様なものである。**彼等を一日よく働かさうと思へば随分骨が折れる。私は…丸山兵吉が或建築の手伝に行つて一日に二時間位しか働かず、その外は手を束ねて、ぼんやり立つて居るのを見た」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 167p

貧民の社会的状況と貧民心理としての《執意遅逡》の関連性を説明する試みである。

「貧民の執意遅逡には多く同情すべき点がある。彼等はいくら働いてもその走る可き軌道が定つて居る。彼等は一日十四五時間労働せねば、三度の食物を口に入れることは出来ない。疲労が甚しい。アルコールが入用になる。そして絶えざる貧困は彼等に精神的不安と、昏迷を与へ、…『貧乏に追ひつく稼ぎなし』となり、執意しても【意志をしっかりとをもって】何の役に立たぬから捨鉢気味に、なまけるだけなまけると云つた様な気分になるのである。之を『油を取る』と云ふて居るが、これが病的になると、その日食ふものが無くても木賃宿に籠城したり、戸口で「わらじ」をはいたまゝ半日位立ち竝【すく】んで居るものもある」。

貧民心理について (三) 1917 (大正 6) 救済研究 5(9) 962p-963p

8. 慰安

(1)

救霊団年報第二号の記述である。

「折々話や蓄音機を雇ふて来て近隣の淋しい人々を慰めて居ります」。

救霊団年報第二号 (1911 年/明治 44 年 12 月) 賀川豊彦初期史料集 1112p

(2)

貧民窟の高齢者の行動パターンと日常的な実践に関するデータである。

「私は老人の間に多くの友人を作つた。…私の祈りを信じて居る老婆で、「猫の婆さん」と云ふのが有つた。林つると云ふ八十二三の老人で有つたが、この婆さんは独り身で(塵箱を覗いて、紙屑を拾ふのが商売であつた)一貫ひ子をしたが、もう成長して居るので、あまり顧みてくれない。それで私を保険会社の様に思ふて、葬式をたのむ、葬式をたのむと云ふて、私の信者となつた。この老人、年が寄つても癩気【さしこみ】があるのだが、痛みが起ると、私をすぐ呼びにくる。そして私が来ると聞くとすぐ善くなるので、私が家の中(二畳敷の家)へ這入るとすぐ全快してしまうのであつた。然し、もう屢々この病気が起るので、私は毎日の様によびに来られた(一日に二度三度と私を呼びに来ることがある。真夜中に呼びに来る)。然しその度毎に、私が祈ると快復するので有つた」。

貧民窟物語 1919 (大正 8) 『開拓者』 14(6) 27p-28p

貧民窟の二畳敷より 1919 (大正 8) 『雄辯』 10(4) 50p-51p

「東京の人間だと云つて誇る老婆で、いつも機嫌のよい、唯もう過去のことばかりを云ふお喋りの女である。二畳敷をそれこそ綺麗にかたづけ何処かの茶人の住む家の様にして居る。若い時には芸者であつたとかで、私と五分も話して居るとすぐ踊り出す。私も踊るのは好きだが、二畳敷で、老婆のくすぶりの踊りは感心せぬので大にあてられるので、そこそこの挨拶をして帰りたいと思つて

も、おばアさん仲々帰らして呉れない。一時間位は立板に水、私を掴〔つかま〕へたらなかなか放さない。帰つても善いと云ふ御許しが出たら私は出獄した様な気になつてそこを飛び出す」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 237p

(3)

貧民窟の高齢者の状況および自殺に関する資料である。

「貧民は決して自殺するものではない。…然し、…貧民にも例外がある。それは老人である。老貧民はよく自殺する」。「生きて居つても世の中の邪魔になるなら、早く死にたいと貧しい老人は云ふ」。「以て貧民生活の末期が如何に悲哀なものであるかゞ知れやう。…私が貧民窟へ来て四年半に見た自殺は老人の自殺計りである」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 141p, 196p

「私の貧民窟で見た自殺の中で私を最も悲ましめたものは大和と云ふ博徒の老婆の自殺で在つた。…七十二になる老婆は長く病床について苦しんでゐたが、…故郷から式拾円の葬式料を送つて来た。老婆はその金を見て安心してゐたが、息子の賭博者はその金を老婆の枕元から盗み取つて負けてしまった。…老婆は何とも云は無かつたさうであるが、その晩…平然として食を食つて、翌朝、足腰の立たない身なるにもかゝらず、二畳敷(その家は二畳敷に一家五人住んでゐた)の隅の蚊帳の吊手の釘に細帯うちかけ縊〔くび〕れて死んでゐた。大和は同じ二畳敷に住んで居て、老母の縊死〔イシ〕を朝になるまで知らなかつた。…之も〔明治〕四十四年の夏のことであつたが、…或貧しい老婆がバケツに首だけをつけて水死を遂げたと云ふことを新聞で読んで同情したことであるが、貧民窟ではこんな事が多い」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 196p-197p

9. 日曜学校

(1)

救霊団年報第二号（1911年）および神戸イエス団年報（1929年）の記述である。

「午前八時…貧民窟日曜学校平均十五名出席▲午後二時日曜学校平均出席七十名」。

救霊団年報第二号（1911年/明治44年12月）賀川豊彦初期史料集 1111p

「〔葺合新川の〕二箇所に於て毎日午前九時より日曜学校を開き、小学校教育に欠けたる情操教育に宗教教育を以てするのである。…児童の心の中に宗教心の芽生を植えつけ、人格の

向上を図るのである。在籍児童 290 人、出席者 平均 150 人、教師 11 人」。

神戸イエス団年報（1929 年／昭和 4 年 2 月）賀川豊彦初期史料集 1117p

(2)

貧民窟の救済と人格の陶冶に関するデータである。

「私の考へて居るのは、貧民窟を救はふと思へばどうしても貧民窟の少年を救はねばならぬと云ふことである。之は啻〔ただ〕に私の経験ばかりではないらしい。救世軍の結果を見てもどうもさうの様であり、他の所々の貧民伝道機関を調べてもさうである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4）賀川豊彦全集(8) 253p

「貧民窟で人格の陶冶をしようと思へば子供を捕へるに越したことは無い。…小学校を出て多くのものが著しく墮落して行く。それで趣味のある宗教教育をしてやれば、それらの青年少年は必ず宗教的に育ち、その社会の改良家になるに違ひない。…この点はよく研究して、日曜学校を盛にし、青年会に力を注ぐ可きであらうと思う」。

貧民心理について（四） 1917（大正 6）救済研究 5(10) 1059p-1060p

(3)

日曜学校の実践に関連する貧民窟児童の行動パターン（貧民心理）に関するデータである。

「家庭的に訓練なく出入りの甚だしきことおびたゞしく、之を陶冶するは甚だ困難なり」。

神戸イエス団年報（1929／昭和 4 年 2 月）賀川豊彦初期史料集 1117p

「貧民窟の子供は低能児の如く取扱つて調度善い処がある。五分間と注意を得やうと思へば余程の努力がいる。彼等が意識を放散して居るのは著しいもので、他人が話しかけても実に写りがわるい。大声で説教をして居る所でもその声も耳に入らぬかの如く平気で説教者の回りで遊ぶ。喧嘩して居つても彼等の注意をひかなければ、人が死んで居ても彼等の注意をひか無い。彼等は…凡てに無頓着で、何者にも驚かない。彼等の注意をほんとうに引かうと思ふことは実に困難なことである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4）賀川豊彦全集(8) 121p

「私の日曜学校の或生徒の父が人に殺されたことがある。その次の日曜日にその生徒が私の処へ来たが、平気で居る。年は九つにもなるのだが、「うちのお父さん、殺されてん」と平気で云ふて

みた」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 121p

「貧民窟の保育所と、貧民窟外の保育所の幼児に就て観察いたしましてもわかりますが、貧民窟の児童は・・・いつも喧嘩ばかりして居ります。私の住んで居ります長屋の向隣の M 雄は、私の日曜学校へ参りまして、僅か十分とたゞぬ中に四人位泣かすことは、なんとも思つて居りませぬ。その子は癲癇発作を年に一二度起す子供であります、その喧嘩好きなこと、驚く可きであります。私はもう一人外に知つて居りますが、その児は M 雄の様に激しくはありませんが、之も理由なしに外の児の頭を擲ることは平気でありまして、私は貧民窟外にかうした子供を見たことがありません」。

貧民心理について (四) 1917 (大正 6) 救済研究 5(10) 1055p

IV. 貧民の心理とソーシャルワーク (救済事業からセツルメントへ)

ところで、1915 年 (大正 4 年) に上梓された『貧民心理の研究』は、貧民救済の実践についてほとんど言及しない。賀川の目的が、有効な救済策を構築する前提として、貧民窟の人々の状況 (特にその心理的な傾向) の把握にあったからである。しかし、賀川が救霊団事業の実践を通して把握した貧民のさまざまな心理的特性 (その力、強み、弱点、困難) は、貧民窟における救済事業の実践に何らかの指針を提供するものであることもまた事実である。しかも、賀川自身は、貧民窟の人々への理解が深まるにつれ、また救済事業への理論的研究が進むにつれて、『救済事業』という思考枠組から『セツルメント (ソーシャルワーク)』へと転回する。したがって、ここでは、貧民窟での生活支援 (ソーシャルワーク) というすぐれて実践的な観点から、実践のガイドラインとして役立つようなデータを拾い出し、貧民の心理との関連で整理した。

1. 「貧民に対する言語、作法は最も注意しなくてはならぬ」

(1)

「或時こんな事があつた。私は一人の貧民窟の婦人を賞めたことがある、眼の前で。そうするとその人はそれを逆倒 [さかさ] に取つて非常に怒り出した。そしてそのために二人も三人もの人が仲裁に這入ら無くちやならぬと云ふ様な事になつた。・・・貧民の多くは衣服が悪いと早やひがんで居る。職業が悪いとひがんで居る」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 149p-150p

したがって、「貧民に対する言語、作法は最も注意しなくてはならぬもので、彼等は少しの言葉使ひ、少しの作法によつて非常に怒る」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8)

145p

「貧民の一番よく怒ることは、名誉〔恥〕に関してである。その次は所有権、その次は身体に関してである」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 145p

(2)

偏狭な羞恥心と《顔》

「貧民の心理の中で特に注意すべきは・・・妙な所にひつかけて多少なりとも世話してやらうと思ふ者を大に困らす感情のあることであります。此種の感情は実に偏狭な羞〔はじ〕と『顔』と云ふ二つの心理から来るのであります。例へば淫売婦に、「淫売」と云ふても怒らぬが『飯が食へ無いか？』と尋ねると、死物狂ひになつて怒る。また、『顔』を潰されると云ふて、とても考へもつか無い喧嘩をする」。

貧民心理について(二) 1917（大正6） 救済研究 5(8) 823p

「淫売婦に向つて、職業上の攻撃を大勢の前で悪く云つても決して怒らない。たとひ野蛮な生殖器の話を云ひ出しても決して怒りはしない。然し、こんなこと位にと思ふことに彼女は怒り出す。たとへば・・・「父が父だから」と云ふ様なこと、また「まづいものを食つている」とか云へばサアもう大変である。すぐ大騒動が始まる」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 148p

「破戸漢〔ごろつき〕にしても、彼等は遊んで居る時、飢えない時は・・・柔和で、温和であつて、ゴロツキがつまらぬと云つたつて、前科者が馬鹿だと云つたつて決して怒りはしない・・・。ところが、「あなたに少し貸して貰はなければならぬ」と彼が私に向つて云ふた場合に、冗談に「それは逆倒〔さかさ〕だ、あなたに貸して貰はなくちやならぬ」と云ふと、もう早や怒つて居る。「人に金が無いと思つて恥かかせやがる」と来る。彼等の間では「金が無い時に金を借せよ」と云ふことは恥をかゝす一方法だと考へて居るのである。彼等はまた大勢の真中で肩をなでられたり、頭を押へられたりすることを非常に嫌ふ。彼等はそれを一種の『恥』だと考へて居る」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 148p

(3)

迷信と物忌み

「彼等の間には迷信と伝習のもの忌みがあつて、それを破つて自由に言語を使用せんとするなどで彼等は必ず怒るのである」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 145p

「迷信の一番強いものは鉾山の人夫、土方、博徒等である。彼等の中で言葉のもの忌みすること甚しく、しと云ふ発音を忌み、『あな』と云ふ言葉を忌み、朝飯に茶をかけて食ふことを忌み、

肩を押へることを忌む」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 248p

一般に、「彼等の間に迷信の多いこと云つたら話にならぬ。…方向を信じたり、日を忌み、名を忌み、時を忌み、住宅の位置、年齢を忌む」。「畜生の生れ変りだと云つて双児を殺すのも彼等であれば、夢を信じて嫉妬の念を燃やし、未来に就て恐れを抱くのも彼等である」。「此等の迷信が如何に彼等を災に落しても彼等はそれで満足して居る。之が彼等の感情の論理であるから仕方が無い」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 123p-124p

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 248p

(4)

貧民の憤怒

「貧民の間には怒りの感情の変性的に発達して居るには驚く外無いと申したい。彼等には怒りの状態がヒステリー的に持続して居るので有つて、子供に訓戒すべきを怒りを持つて、依頼する所を怒りを以つて威圧せんとする」。

貧民心理について（二） 1917（大正 6） 救済研究 5(8) 823p

「貧民は理由なくして怒る。入浴して居つて一寸と水がかまつたと云つて怒る。睨んだと云つて怒る。足を踏んだと云つて怒る。一寸とあたつたと云つて怒る。言葉尻をつかまへて怒る」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 145p

「貧民の憤怒の興奮情態は実に凄いもので、大抵は家具一切を破壊しつくす。…ほんとの人間の憤怒を見たいと思へば貧民窟に来るのが一番よい。私などは人間が怒つたら衣服を裂くときいてみてもその実物を見なかつたが、漸く貧民窟で屢〔しばしば〕之を見て、なる程と合点した。貧民で二日三日位つゞけて怒り狂ふて居るものは決して少なくない」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 145p

(5)

子供虐待

「貧民感情の激烈なことは殆ど想像がつかない。彼等は人を殺し、人を罵る。…自分の子を叱るのに仇の様に叱つて居る」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 128p

「一寸と貧民窟で、私の向いのおかみさんが娘が少し小遣ひを費ひすぎたと云つて叱つて居る処を書いて見ると、『ど淫売の、ごうたくれめが、おあしが天から降つてくる様に思つてけつかるか、どちくしようの、どたぬきめ！ こんど、こんなことしやがつたら、ふんで、けつとばして殺すめにしてくましてやるから、おぼへてけつかれ！』」。

「それで紐育〔ニューヨーク〕市では特別に此の為に貧民窟児童保護係が出来た程である。日本にも此必要があると思ふ。之の為にどれだけの児童が善良に發育すべきを、こじくれるであらう」。

「我子を虐待すると云ふこと・・・は然し貧民窟には朝晩あることで、私が四年半前に初めて貧民窟で寝た晩に驚いたのは、向隣の真夜中の親子喧嘩であつた。雨が降つてゐたが、裸で十五になる息子が廊路〔路地／通り〕を逃げ出した。親爺が後を追つかける。原因は親子が一つの蒲団に寝てゐたが、息子が少し場所を多く取り過ぎたと云ふのであつた。之だけでこんな大きな騒ぎするのかと私は吃驚〔びっくり〕した」。

2. 「善人の様に柔和な人でも貧民窟では決して気を許してはならない」

「善人の様に柔和な人でも貧民窟では決して気を許してはなら無い。・・・或時は柔和で、或時は人を割く様な激情を發する・・・、貧民一般の傾向がそうである」。

「今柔和に話を聞いて居るかと思へば次の瞬間には刃を呑んで、脅迫してみたり、今笑つて居るかと思へば、次の瞬間に於ては泣いて居る。そんな例を私は無数に見ました」。

「反射的〔衝動的〕のみであれば、こちらの言行を慎んで居れば、それで済みますが、分裂的であるために、彼等自身何を仕出かすか自分手にわから無いのであります。貧民はよくそう云ひます、『何をするやら、わからないぞ』と」。

「私の西隣は淫売の盆屋であるが、一月に一度は必ず家をめちやめちやに破壊する。それが・・・その前に妙に法華のお題目をあげて居る。そうして居ること一、二時間、・・・処がそれがパタと止ると、今度は七匹の悪鬼を体中に潜ませたかと思ふ程に暴れ狂ふ。大正三年五月十六日も私

はその巻添を食つて夕餐最中に食膳は顛覆される。硝子障子は壊されてしまつた。此日も彼は朝から妙見山をおがんでゐた様である」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 129p

「然し、そう激変するからと云つても、…複雑な情緒から出るのでは無くて、たゞ簡単な一本道を屈[まが]りくねると云ふだけの話で、…金を借るために或時には柔和に、或時には怒つて見るのである」。

貧民心理の研究 1915(大正 4) 賀川豊彦全集(8) 129p

また、「此等の人々[ごろつき]は危険だからあまり寄せ付けることが出来ない。大抵のものは何時飼主に噛み付くかわからないのである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 191p

3. 「この人なら大丈夫だと信用していると背負投げを食わされる」

「私は貧民窟で孝行娘の評判を取り、警察署から二度まで、表彰されたものが、親が死んで後、自分の宅を賭博の盆屋とし、自分も賭博を打つて居るのを見ました。…彼等の意志は連続することが出来ないのであります。だから、彼等は淫売して乞食の親を養ふことを以つて最も孝行だと考へて居ります。「おしか」と云ふ四十女にそんなものが居りました。その孝行なことは警察署が表彰した娘どころではありませんでした。然し、「おしか」に淫売が悪いと云ふことが少しもわから無かつた様でした」。

貧民心理について (四) 1917 (大正 6) 救済研究 5(10) 1058p

「貧民の性格は一般に切れ切れであるが、その情緒に於てもそうである。孝行娘と云はれるものでも、善く研究すれば…情緒の不連続な場合が多い。…このあたりの心理は貧民窟外の人々の理解の出来ぬことであつて、別に孝行はせねばならぬからと云つてして居るのでも無ければ、努力して居るのでも無い。…直覺的、本能的な…意識と同一な作用によつて孝行と云ふ行為になるものらしい。…処が、その無意識的行為がどうかして破れると、その人間はもう前と打つて變つて、悪人となる。即ち彼等の孝行と云ふものが自覚あるもので無いからどうも破れ易いのである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 130p

「孝行息子では無くとも、貧民窟では、人の善い人が沢山ある。殊に貧民窟に九年十年と居る人間は大抵善人である。こんな人を私は何十人と知つて居る。処がきて、**此等の人々が何時も善人かと云ふとそうでは無い**。…だから此人なら大丈夫だと信用して居るとポカンと背負投げを食はされる。三ヶ月四ヶ月は善人である。その中一日だけ夫婦喧嘩をする、賭博をする、罵る。そしてまた翌日は元の善人となつて居る。そして今度は一年も善人で居る。そうして居る中に又破れる。或者は周期律的に感情の高低がある」。

4. 「貧民を親切に取扱うとつけあがる」

「私が少し親切にしてやると、私の内の障子をはづして帰る、火鉢を持つて帰る、大きな飯櫃〔めしびつ〕を持つて帰る。私の名で晴衣を造へると云ふ様な凶太いことをする男が貧民窟に居る。私はそれでも黙つて居つたが、それはそれは非道いことをする。貧民窟で生活して始めて人間の穢いことがわかる。殊に盗癖のあるものと、賭博癖のあるものの吝嗇なことには私も驚いてしまつた」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 148pp

「貧民を少し可愛がると、もうつけあがる。…乞食や破戸漢〔ごろつき〕を少し親切に取扱ふとサアもう仕方が無い。つけあがつて、つけあがつて、それはなんとも云へ無い様な態度で施しを要求する。「おまへなどは貧民をだしにして食つて居るのだから、わしが乞つてやれば、それが反つて幸福になるのではないか」と半乞食の破戸漢が私に云ふた」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 150p

5. 「三時間や四時間は面白くもない同じことを聞く気でなければ成功しない」

「貧民の意志の研究をして一番面白いのはその回転である。彼等は実にくだい。繰返し繰返し同じことを云ふ」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 168p

「或私の近所の淫売の盆屋の主人は夫婦喧嘩して私が女を隠したと云ふので私のうちへ暴れ込んで来た。すると今度は悪かつたとわかつて二時間程の間に同じことを並べて十二、三度繰返して謝して居た。或時に私の向へに夫婦別れをすると云ふ喧嘩が有つたが八時間ぶつ通しに同じことを喋りつづけて闘つてゐた。或喧嘩は三日続く。私の裏の親子喧嘩は三日続くことは決して珍らしくなかつた。同じこと云ひ、同じこと云ひ、わかり切つたことを折返し折返し喋りつづける」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 168p

「貧民がアルコールを飲めば猶くどくなる。然し米代が無くてこぼして居るものゝくだいののに

較べたら酒飲のそれは遥かに少ない。乞食のくどいのも、破戸漢のくどいのも全く同一心理である。それで貧民窟の喧嘩や破戸漢を処理しやうと思へば三時間や四時間は面白くも無い同じことを静かに聞く気で無ければ決して成功しない」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 169p

ちなみに、「貧民階級の喧嘩の仲裁はなかなかむづかしい。筋道をたてゝ親分の方から話をつけてもらはねばならず、仲裁の儀式礼法を知つて居らねばならぬ。たとへば乗込んで行つた場合には乗込んだ者には三分の利しか無く、乗入れたものには七分の利があると云ふ様なことは一種の不文憲法となつて居り、土方の仲裁には小指を切つて敵に渡すと云ふこと（貧民の中に小指を切つて居るものゝ多いのは全く此為めである）などは、局外者では少しも考へのつか無いことである」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 191p

6. 「貧民は依頼心が強い」

「貧民は知的努力が少ないから意志の選択がない。…彼等がたゞ客観世界の運のめぐりと云ふことをあてにして居ることである。則ち彼等は自ら進んでその道を開拓すると云ふことを知らないから、唯『さい』の目に自己の運命をまかせ、黄金の釜を探さん為めに各地を放浪するのである。…即ち貧民の僥倖心から見れば、彼等の依頼心の強いのも乞食となるのもまた一種の僥倖心から出たこと…である」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 175p

「貧民の多くはエピキュリアンである。…労働者の多くは十五日間の賃金を一日の女郎買に徒費してしまつてそれで満足して居る。日本の寄席や活動は多くは下層民を相手にして居る。遊郭もまたそうである。…然し、貧民がいつも快樂で満されて居らないのは事実である。然し、彼等は平常その不快について…訴へることは決して無い。彼等は盲目的に時の来るのをまつて居る」。

貧民心理の研究 1915（大正4） 賀川豊彦全集(8) 140p

7. 「説教は決して彼等を動かし得ない」

「貧民の意識は明かに普通民の意識と違つて居る。その一例は貧民の夢が普通民の夢と全く違

つて居るのを見てもわかる。…彼等はよく夢で泣き、夢で怒る。そして醒めた後には全く現実の真理として信ずる。彼等は夢と現実とを全く混同せんとする傾向がある。…貧民は決して知識で判断を与へて居るのでは無い。意志と直覚とを以つて判断を与へて居るのである。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 197p-198p

「だからいくら知識を以つて説いても彼等の道徳的行動を翻して反省せしむることは出来ない。説教は決して彼等を動かし得ない。擲るか、抱くか、その二つの外彼等を反省せしめない。それで無ければ時の経過を以つて『時間の論理』を見るより外は無いのである。時が経ち、彼等の周期的感情変移が過ぎると自然彼等は自分に或真理を発見して居る。それで私は破戸漢に向つて嘗つて説教したことが無い。私が破戸漢に暴れ込まれた場合には唯時間の経つのを待つばかりである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 198p

8. 「貧民はよく嘘をいう」

(1)

「貧民はよく嘘を云ふ。…出鱈目放題のことを並べるのが『貧民の嘘』である」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 124p

「自殺の狂言の多いのも貧民間が一番多いであらう。金持の間であれば、自殺の狂言などは一寸と冗談半分には出来ないが、貧民間であれば、自殺の狂言などは後々笑事ですましてくれるから、ごく何でも無いのである」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 124p

「貧民は嘘をよくつくものだから、仲々他人の真理を信じない。然し本は信じる。貧民は本に書いてあるものなれば、小説でも皆ほんとの事を書いてあるものだと信じている」。

貧民心理の研究 1915 (大正 4) 賀川豊彦全集(8) 125p

(2)

「貧民窟の中には…一日冗談半分に日を送り真面目の判断が全くつかないものがある。木賃宿に住んで居る M と云ふ男を私は知つて居るが、私に一度として真面目な応待をしたことが無い。どこからどこまでが冗談やら薩張【さっぱり】わから無い。そして本人も私の云ふことが、どこ迄冗談やらわからぬらしい。或時も弍拾銭で或仕事を命じた処が、それを先にくれよと云ふ。先にやると仕事をしないからと云ふと、そんな事は無いからと例のじやらついた句調で云ふ。それで私は信用してそれを与へると、鉢巻して「今するから」と云つて逃げて帰つた。貧民のうちには此種類

の人々が頗る多い」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 150p

9. 「貧民は感謝しない、しかし感恩の念を忘れてはいない」

「貧民の多くは感謝と云ふことを知らない。親も感謝しなければ、子にも感謝せよと教へ無いのである。…然しそれにしても貧民間にも偶には心より感謝を知つて居るものもある。それでも一割と見積れば多過ぎる。まア百人に一人か千人に一人とか真に感謝を知つて居るものは有らう」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 149p

「毎年のクリスマスに私は貧民窟の子供を、中流階級の基督教信者の家庭に招いて貰つたが、彼等がお辞儀を知ら無いのには驚いた。『長』と云ふ乞食の子を或時アメリカ通ひの船長さんのお宅へ連れて行つた事がある。すると、『長』は御辞儀を知ら無い。御礼のつもりで、座敷の真中で鯪こ立〔シャチホコダチ〕をしたそうである」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 152p

「私の最も親しい老婆に『猫の婆さん』と云ふのが有つた。…八十になつても、癩気があつて瘻瘻がくる。その度に私を呼びに来る。…一日に二度三度と私を呼びに来ることがある。真夜中に呼びに来る。それで老婆は、私に感謝の印として、色々なものを塵箱の中から持つてくる。…またお玉と云ふ乞食の妻は、少し低能だが、感謝の心で、濱から「ジャガタラ」芋〔ジャガイモ〕を拾つて来て持つてくる。食うてくれと云ふのである。…然し之で如何に彼等が感恩の念が強いかわ分るであらう。日本の貧民は感恩の念を忘れてしまふ程墮落したものではない」。

貧民窟の二畳敷より 1919（大正 8）『雄辯』10(4) 51p

10. 「小さい約束でも守らねばならぬ」

「凡て、貧民窟の仕事は小さい仕事一心を使つて注意と親切を要する仕事が多いので、大まかにこなしつけることが出来ない。貧民程小さいことに凡てひがむものは無いから、このひがみを取るために、無理な要求を聞か無い様になると共に、一寸と引受けたことは直に、小さい約束でも守らねばならぬ」。

11. 「貧民は尊敬と愛で近づくべきものである」

(1)

「貧民窟にも自我はあります。同情されることを好まない自我があります。愛と同情は違ひます。貧民にも『顔』と云ふ道徳がありまして、一度施米を貰つた以上は顔がたゞなくなるのです。それで同情で無ければ貧民を救済出来ないと思ふ様な無謀なことを考へて下さるな。…同情は貧民を侮辱して居るのです。私は貧民窟に十年住んで、日一日貧民を尊敬する心が高まるばかりです。貧民は尊敬と愛で近づくべきものです」。

窟の二畳貧民敷より 1919（大正 8）雄辯 10(4)

48p

では、なぜ貧民を尊敬する心が高まるかといえ、それは貧民の心理（行動パターン）に存在する何らかの力を発見するからである。

(2)

（能力・意志力・家を思う力）

「私の隣の雪枝さんも、ひさえさんも娼妓に行きました。二人共、私の日曜学校の生徒でした。…私は其二人の性格をよく知つて居る。二人共下等な人間ではない。脳力に於ても意志力に於ても高等女学校位は卒業する力を持つて居る。二人共賢い女である。家のことを思ふ点に於ても二人共立派なもので有つた。然し貧民窟に住んだばかりに、貧民であるばかりに売られて行つたのです。…責めて下さるな、これ等の娘等は皆貧乏の為に売られて行つたのです」。

貧民窟の二畳敷より 1919（大正 8）雄辯 10(4) 46p-48p

(3)

（子と親に尽す力）

「殊に『おしか』と云ふ三十女の淫売婦の如きは、貧民窟の二畳敷では有名な孝行娘で、私は、その孝行に少なからず動かされたものである。親は乞食で、息子も有つたが亭主が無いので親子三人を女の細腕で養ふことが出来ず、たうとう淫売婦になつたものの、彼女が子と親に尽した努力と奮闘には同情と尊敬の涙が自然に流れ出た。…私はその友人となつて、淫売婦の尊敬すべきを知つた」。

貧民窟の二畳敷より 1919（大正 8）雄辯 10(4) 50p

(4)

(貧民の同情心・貧民窟の相互扶助の力)

「私が讚美せざるを得ないのは、…貧民同志が相互に助け合つて居ることです。私の裏の『喧嘩安』は、前科九犯の『スリ』でしたが、一年にどうしても十七八人は人を助けると云うて居りました。そうでしょう。其度毎に私の処へ米を貰ひに来ました。…貧民窟の博徒が入監でもすれば、徴兵にでも行く様に騒いで、皆で同情して差入をする。病気になれば、近所で救済する」。

貧民窟の二畳敷より 1919 (大正 8) 雄辯 10(4) 48p-49p

「近所では出産と死亡の際には大抵世話役が有つて、金を集める。…これは世話ずきのおかみさんが廻つてくれるのである。貧民窟ではこの世話ずきのおかみさんがあるためにどれだけ助けられるかも知れない。この種類のおかみさんは貧民窟では顔ききの方で、喧嘩の一つ位はやりかね無いこともないが、…ゴロツキにも親切であるし、泥棒にも親切であり、金と貧民には親切である。たゞ世の中を何とも思つて居らず、少し位の犯罪は手柄の様に考へて居る…」。

貧民窟十年の経験 1919 (大正 8) 賀川豊彦全集(9) 160p

「病気だと云へばうるさい程親切にしてくれる。…どんな病人でも世話してもらへる。余程悪い人か、新しい人で無ければ困ることは無い。どんなものでも相互扶助する。それでドン底の日本人は非常に親切なものであると私は感佩〔かんぱいノ心に深く感〕して居るわけである。私が貧民窟で病気で寝ると乞食して居る様な貧乏人が、バナナを持つてくる、蜜柑を持つてくる。その人の収入が一日五十銭しか無くとも三十銭位の見舞品を持つて来てくれるのである。そんな時には私は涙が流れることが多い」。

貧民窟十年の経験 1919 (大正 8) 賀川豊彦全集(9) 160p

「井上のお梅さんと云ふ人は私は生れてから見た中で一番親切な人です。私はその人が理屈もなにもわからずに生れ落ちた親切な心で幾百人の人を世話をしたかと思ふと、日本にこんな立派な女が野生的にあるかと思ふと、日本人種に尊敬を禁じ得ないのです」。

貧民窟の二畳敷より 1919 (大正 8) 雄辯 10(4) 49p

「それで近所と仲善くすると、近所が凡て一家族の様になつてしまう。もしも堅気のものばかりであれば貧民窟に居る方が、私に取つてどれだけ仕合せか知れ無い。…貧民窟程仲善くなる所は無い。…『おばさん、今日はウチ飯焚かずや食はしてくれんか?』と云へば、食ふものが無くても食はしてくれるのが貧民窟の侠気と云ふものである。貧民窟では之を『気まへ』と云ふて居るが、貧民窟では、この『気まへ』一つで動いて行くものである」。

貧民窟十年の経験 1919 (大正 8) 賀川豊彦全集(9) 160p-161p

「兎に角貧民は同情心が厚い。それに違いない。多分彼等の相互扶助の金額は日本全国の慈善資金の幾百倍に当るであらうと私は考へて居る。それで彼等は永遠に頭上りが無い。共倒れの悲劇！ 之より彼等を上手に救ふてやることも社会改良家の顧みる可き所であらう」。

貧民心理の研究 1915（大正 4） 賀川豊彦全集(8) 152p

12. 「救済するのではなく、友達としてそこに植民するのではなくてはならぬ」

(1)

「私は貧民窟に住んで貧民生活の根本から改造することが、如何に困難なものであるかを知ると共に、…私自身の理想としては、貧民窟の撤去にあるけれども、今直に貧民窟が無くなら無いとすれば、貧しい人々と一緒に面白く慰め合つて行きたいと思ふのである。之は必しも慈善では無い。之は『善き隣人』運動の小さい糸口である。必しも大きな事業では無い。人格と人格との接触をより多く増す運動である。で、之は金でも…出来ない。…即ち貧民窟に住むと云ふことそのことだけが、その使命であるのだ」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 163p

「セツルメント事業は、救済事業とは性質を異にする。若しセツルメントの仕事が、救済せんがための運動であるとするならば、それは餘りに高慢な運動である。ここに一人の医師が貧民窟へ住み込むとするならば、それは、救済するのではなくて、友達としてそこに植民するのではなくてはならぬ」。

セツルメントの運動の理論と実際 1926（大正 15） 雲の柱 5(4) 41p

「私は、過去満十年間に貧民窟で大きな仕事をしたとは思はぬ。ただ、貧民窟で可愛がられるものとなつたと自覚して喜んで居る。また貧しき人々も、私の処へ来れば、慈善家から受くる親切と違つた、友人として相談が出来ると云ふことをよく知つてくれた。それで凡ての相談を持つて来てくれる。それは…友人としての相互扶助である」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 163p-164p

(2)

「セツルメントは必しも救済事業の団体ではない。だから、直接救済事業に指を染めなくともいゝのである。たゞ親切に救済を要する事件の起つた場合、それを各々の場合に依じて、それぞれ救済機関へ連絡したらいいのである。例へば、老衰者のある場合は、養老院なり貧民病院へ、孤児は孤児院へ、肺病人は結核療養所へ—と云ふ工合に助けを要する人々を親切に取扱つて

他の救済機関へ報告したらいい」。

「そして、その**界限の社会事情を絶えず観測し、之れを調査して発表したらいい**のである。失業者のある時は失業防止運動もやり、進んでは**孤立の労働者間の連絡を計り、労働の組織を計る**のである。そして**エライ人物があれば、之れを重じて、先へ先へと進めるために力を籍すと云ふのでなくてはならぬ**」。

セツルメントの運動の理論と実際 1926（大正 15）雲の柱 5(4) 54p

次の資料は、1928 年（昭和 3 年）度のイエス団友愛救済所《人事相談部》および《調査部》の事業報告である。

「人事相談部

救済基金にとぼしきため充分なることは出来ないが**県及び市の社会課と連絡をとりて**出来得る丈の相談相手になりつゝあり。今年取扱ひたる事件を分類すれば左の通りなり。

老後の身を救護院に送る	2 件
無籍児の就籍	12 件
寄留手続	8 件
糊口に窮して物品を与へたる者	153 件

調査部

時間の許す限りを利用して**細民街の二十箇年の死亡調査をなした**。まだ集計が完成したと云ふ訳ではないが、大体調査結果、乳児死亡率が高く、恐らく日本に於ても最高位を示すのであらう、約四十%とまでは乳児、満一箇年未満で死亡するのである・・・」

神戸イエス団年報（1929 年／昭和 4 年 2 月）賀川豊彦初期史料集 1117p

13. 貧民窟改良家の二つの心得

(1)

休養の必要性

「貧民生活の急迫に会ふたものは大抵神経衰弱にかゝる。それでその人々の間に住んで居る人もいつと無くそれに感染するのである。殊に、脅迫を受けることが度々重なると、神経衰弱にかかることが多い」。「そこは**注意して自ら外に出て休養してくる必要がある**。私はそれを強く感じて居る」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8）賀川豊彦全集(9) 163p

(2)

高慢になる危険

「もう一つの危険は高慢になることである。みな貧乏であるのと、皆無学である為に、つつい高慢になることは、貧民窟改良家の危険である。それで私は・・・自らが、貧民窟に全く溺れ無い様に努めて居る」。

貧民窟十年の経験 1919（大正 8） 賀川豊彦全集(9) 163p

完